

京都大学においては、地域社会や日本のみならず、国際社会とも連携した環境関連研究が多く展開されており、これらのプロセスや成果を通じた社会貢献は、枚挙にいとまがありません。しかしながら、これらの情報や知見は、必ずしも共有されておらず、今後の課題と考えられます。また、学生を含む構成員による社会貢献・コミュニケーション活動も盛んであり、これらも、京都大学を特徴づけるものと考えられます。

ここでは、環境関連の公開講座の開催について報告すると同時に、社会と接点を持ちながら活動する学生の取り組みの一部を紹介します。

環境関連の公開講座

京都大学の研究機関や教職員が主体的に関わり、京都大学などを会場に行われた2005年度の公開講座の一覧を表10に示します。この他にも、国内外において、社会貢献・コミュニケーションに結びつくような取り組みが進められています。

表10 2005年度公開講座一覧

実施日	講座名	本学関係機関・窓口	主な内容・参加者数など
4月9日	レクチャーシリーズ(ジュニアレクチャー) 「海の動物たちを絶滅から救うタイと日本の共同研究プロジェクト」	総合博物館	ジュゴン、ウミガメ等絶滅の危機にさらされた海の動物たちの保護活動および生態の基礎研究の成果とを、美しいイラストとともにわかりやすく紹介された。
5月12日	シンポジウム 「21世紀に森・川・海が再生するために」	フィールド科学教育研究センター 高知県水産試験場	高知大学との共同研究施設開設記念シンポジウム。海、川、森の自然循環を科学的に調査研究する立場から、海の再生に森の再生が不可欠と提言された。参加者約400名。
5月14日	レクチャーシリーズ(ジュニアレクチャー) 「最近、森の外でクマさんと出会うわけ」	総合博物館	近年、クマが人里に下りてきた原因を中心に、クマの生態や、人間とクマの共存の問題をわかりやすく講義された。
5/22～ 8/31	環境まんが展	環境保全センター	環境をテーマに描かれたイラスト・漫画が展示された。
6月28日	はんなり京都嶋峯塾 第三回 「京の緑、世界の緑 一竹の教え」	地球環境学学舎・三才学林	地球環境学の研究成果を地域社会と双方向の活動で広め、新たな美意識や生活文化を探る連続懇話会。第一回[水]第二回[土]は前年度実施された。定員60名。
7月6日	「環境安全保健機構開設記念フォーラム 今一度環境憲章を」	環境安全保健機構・環境安全課	京都大学環境憲章の再確認と本学の環境への取り組みのキックオフとして開催され、グローバルな活動とローカルな活動両面から意見交換がなされた。参加者約180名。
7/28～ 7/30	芦生研究林公開講座2005 「森のしくみとその役割-森にからして-」	フィールド科学教育研究センター 農学研究科	市民一般を対象に、森林の持つ様々な機能を講義と体験実習を組み合わせ、わかりやすく示し、適切な森林保全や利用に関する知識や理解を深めるための支援が目的である。自然・森林の解説講義、樹木の識別実習、森林環境体験等が提供された。参加者58名。
8月4日	春秋講義 「森里海の循環型社会の確立はなぜ必要か」	フィールド科学教育研究センター 総務部社会連携推進課	
8月12日	「湖南の森生き物フォーラム」: CERの森の公開と講演会	生態学研究センター	大津キャンパス実験森林区公開と、湖南でフィールド調査や里山活動をしている研究者らによって湖南の多様な生き物の生態などの講演が行われた。参加者約50名。
10月1日	健康科学市民公開講座「健康を守るために今、できること」 「まろろ環境と健康」	医学部保健学科	環境と健康の関わりについて考え、環境に配慮し地球にもやさしいライフスタイルのあり方について学んだ。参加者数155名。
10月6日	「地球環境:企業と市民社会の対話と協力」第1回 「地球境界時代の企業経営」	地球環境学学舎 高等教育研究開発推進機構	「環境を考える経済人の会(B-LIFE21)」の成り立ちと活動内容が紹介され、企業の社会的責任が目ざされる現在、ステークホルダー・モデルの構築と、フローからストックを有効活用する経済への転換の必要性等が語られた。
10月13日	「地球環境:企業と市民社会の対話と協力」第2回 「化石燃料と環境-持続可能な発展に向けて-」	地球環境学学舎 高等教育研究開発推進機構	原油の性質や様々な「埋蔵量」の概念を整理し、石油エネルギーの中東依存の状況、原油高騰の原因と見直し、石油関連企業の温室効果ガス削減への取り組み等について講義された。
10月14日	第1回 海域・陸域統合管理論セミナー「流域管理からめざす地球環境学-琵琶湖・川水系における研究活動をもとに-」	フィールド科学教育研究センター	参加者約20名。
10月20日	「地球環境:企業と市民社会の対話と協力」第3回 「アサヒビールの環境経営」	地球環境学学舎 高等教育研究開発推進機構	環境対策を「企業の社会的責任」と位置づけ、企業の上層主導で行うことの必要性が語られた。また廃棄物処理・環境負荷削減・水源保全・環境配慮型商品や技術の開発・環境活動の支援等に関する自社の実践事例を具体的に紹介・解説された。
10/22～ 10/23	森林科学公開講座 「サステナブルってなんですか?～拡がる森の見方～」	生存圏研究所 農学研究科森林科学専攻	森林の多様な機能の重要性をテーマに、サステナブルをキーワードとする多様な観点からの講義と樹木識別実習などの体験を合わせ実施された。参加者数59名。
10月23日	第6回国際異体類生態学シンポジウム-市民公開講演会- 「海の生き物と人の未来:共存の道を探る」	フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所	水深の浅い海中で育ち人間活動の影響を受けやすいヒラメやカレイ等の異体類について、その生育環境と資源量変動の関係を中心テーマに各国の研究発表が発表された。海と海洋生物保全のために植林活動をする必要性等が提唱された。各国研究者約140名が参加した。
10月27日	「地球環境:企業と市民社会の対話と協力」第4回 「佐川急便の環境経営-企業の社会的責任(CSR)」	地球環境学学舎 高等教育研究開発推進機構	天然ガス自動車導入のいきさつ、クライメート・セイバーズ・プログラム、モードシフト、物流の効率化の取り組み、産学連携共同研究やグリーン物流パートナーシップ会議など社外との協働を重視した自社の取り組み等について紹介・解説された。
11月2日	春秋講義 「生命と地球の共進化 -ヒトと地球の共生の原点-」	総務部社会連携推進課 地球環境学学舎	
11月10日	「地球環境:企業と市民社会の対話と協力」第5回 「持続可能な社会をめざして NGOと企業のパートナーシップの可能性」	地球環境学学舎 高等教育研究開発推進機構	環境NGOの立場から、環境・経済・社会的公正の調和がとれた「持続可能な社会」をめざして必要とされるライフスタイル、企業の環境活動や現在のCSR報告書の課題、企業とNGOとの協働のあり方、消費行動を変える情報提供のあり方等について実践事例を交えながら講義された。
11月11日	市民講座総括シンポジウム 21世紀COEプログラム「エネルギー-環境」	エネルギー科学研究科 21世紀COE事務局	「環境調和型エネルギーの研究教育拠点形成」プログラムの一環として取り組まれた全国47都道府県での市民講座活動の内容と成果を報告し、今後の民産官学の連携を考えた。参加者76名。



実施日	講座名	本学関係機関・窓口	主な内容・参加者数など
11月17日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第6回 「環境倫理学の現在 持続可能性とは何か、石油のなくなる日」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	環境倫理学の立場から、「持続可能性」概念を歴史的に解説した上で、資源の枯渇と廃棄物累積を回避する方策が課題であること、非通常型資源開発の問題点、「石油埋蔵量」を左右する要因の説明があり、化石燃料の使用を止める事の必要性が提唱された。
11月19日	上賀茂試験地 秋の一般自然観察会	フィールド科学研究センター 上賀茂試験地	上賀茂試験地の自然観察や炭焼き窯の見学が行われた後、散策コースとネイチャークラフトコースに分かれ、自然体験がなされた。参加者27名。
11月30日	はんなり京都嶋麓塾 第四回「地球の空、京の空」	地球環境学・学舎・三才学林	
12月1日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第7回 「バイオマスと資源とする新しい社会創り」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	21世紀の企業には経済発展と同時に資源枯渇と環境負荷の克服が迫られているという問題意識から、日本のバイオマス利用の現状と今後の取り組み計画が解説された。また、企業活動評価尺度に環境負荷を無害化する費用を含めることの有効性が提唱された。
12月8日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第8回 「イオンの社会貢献活動」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	小売業の立場からの社会貢献活動を、環境保全・森の再生・植樹・地域文化の振興・国際的文化・人材交流等広範な実践事例を挙げて報告された。
12月15日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第9回 「地球温暖化対策の経済評価」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	経済学の立場から、京都議定書からの米国の離脱の理由と影響を解説した上で、日本の温暖化防止対策としての炭素税・環境税の導入のとるべき方向等を講義された。
12月18日	フィールド科学研究センター第2回時計台対話集会 「森と川と海の対話～安心・安全な社会を求めて」	フィールド科学研究センター	安心・安全な社会の再構築のために重要な自然的基盤となる森と川と海のつながりを、実践的研究者の講演と参加者との対話を通して考える集会。参加者約350名。
12月22日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第10回 「損保経営の視点から環境経営を考える」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	損害保険事業と気候変動問題との関係を説明した上で、社会的責任投資について、最新のCSRの世界的動向を解説し、損保企業として取り組まれている環境を含むCSRへの具体的な実践内容等を紹介・解説された。
1月12日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第11回 「チャリティショップと国際協力」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	リユースを通じ国際協力を実践しているNPOの立場から、取り組みの契機と設立の経緯、活動方針とその内容について紹介・解説がされた上で、リデュースが呼びかけられ、途上国の貧困問題の解決の重要性が説かれた。
1月17日	「アスベスト問題・京都シンポジウム ～もう一歩ふみこんで、知り、学び、考える～」	環境安全保健機構 環境・安全・衛生委員会	アスベストに起因する健康被害が社会問題化する中、迅速かつ的確に対応するために関連する基礎的知見を解説し、参加者からの質問を題材に情報共有が行われた。参加者345名。
1月19日	「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」第12回 「総合討論 明日への一歩」	地球環境学 高等教育研究開発推進機構	連続公開講座の最終回として、アンケートの意見や質問を題材にパネルディスカッションをする事を通じ、これまでの講義内容と参加者をつなぎ、持続可能な社会の構築について参加者と共に考えた。8回以上参加された一般参加者約30名に終了証が手わたされた。
2月11日	市民講座 「脱温暖化社会を極める」	総務部社会連携推進課 地球環境学	温暖化の影響に関する研究・情報を整理し、将来望まれる社会像を想定した上で現在の脱温暖化対策の選択を行う重要性とその道筋を、広く社会の各部門にわたる検討を加えながら、明解な解説がなされた。参加者228名。
2月18日	「経済研究所シンポジウム やさい先端政策分析 ～京都から農・関へ～」 「地球温暖化問題からみた今後の社会経済～京都議定書の発効を踏まえて～」	経済研究所 先端政策分析研究センター	京都議定書の意義と限界を解説した上で、自然破壊が文明崩壊を招いた事例を紹介し、環境と経済の統合に向けてとるべき将来的な方向を示しながら、社会経済を革新させるポイントについて言及された。参加者数約370名。
3月15日	「第2回持続的生存圏創成のためのエネルギー循環 シンポジウム ～バイオマス変換と宇宙太陽発電～」	生存圏研究所	
3月28日	はんなり京都嶋麓塾 第五回「京の火、世界の火」	地球環境学・学舎・三才学林	

* No.11「地球環境・企業と市民社会の対話と協力」は、本学学生対象の全学共通科目「環境政策論Ⅰ」であると共に、2005年度特別公開講座として開講された。環境NGO「環境を考える経済人の会(B-LIFE21)」のメンバーによりリレー講座形式で全12回にわたり実施された寄附講座である。一般参加者は約100名。

学生の環境提案・コミュニケーション活動

◇20回を重ねました！「リサイクル市」：リサイクル市実行委員会



記録に残る限りでは、1987年に京都大学文学部構内で開催されたのが初めてであり、以来、進化しながら続いてきました。目的は、卒業生から新入生へ、大切に使った物を、その気持ちとともに、バトンタッチしていくこと。リサイクル市実行委員会スタッフが中心となり、1月下旬から、京都大学／大学院を卒業する学生を対象に、物品提供の呼びかけを行い、収集・保管し、3月末～4月初旬の一日、新入生や在校生を対象に、リサイクル市を開いています。

「市」といっても、値札がついていて、好きなものを購入していく訳ではありません。気に入ったものは、抽選やじゃんけんで、できるだけ公平に獲得していく仕組みです。支払いも、カンパという形で、実行委員会は、このお金だけを運営資金として、やりくりしています。まさに、支え合う学生の知恵と力と想いのたまもの。最近では、地域の方からの提供も増え、この輪はどんどん広がっていきそうです。

◇キャンパスの弁当箱のごみを減らしたい！「リターナブル弁当箱」：京大生協環境委員会E-COOP

京都大学のキャンパスでは、生協の販売する弁当だけで年間16万個、学外から持ち込まれる弁当を合わせると倍の30万個以上の弁当が消費されていると考えられます。そのほとんどに使い捨て弁当容器が使用されており、それだけのごみが出ていることになります。



かわいいデポジットカードの名前は「えこか」

この大量のごみを減らすために、京都大学生協ではリターナブル弁当箱を使った「リターナブル弁当」を販売し始めました。弁当の価格にデポジット（預かり金）を上乗せした価格で販売され、デポジットは弁当箱を返却する際に払い戻されます。デポジットのやりとりを省くためにデポジットカード（弁当箱返却時に現金を受け取る代わりに、同額の金券として受け取る）を利用することもできます。これは、京大生協環境委員会E-COOPの学生が中心となり、企画・立案したもの。地域のごみ減量に向けたアイデアや意識にも結びついていくものとして注目を集めています。



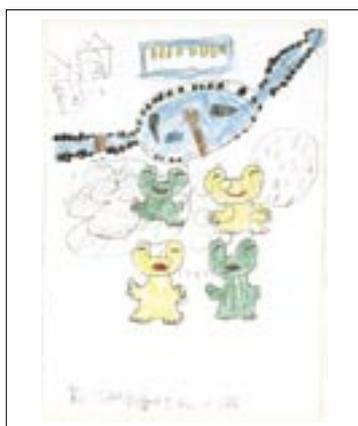
◇ そのほかの活動紹介

◇机の上ではわからない！フィールドに飛び出して、実践！

- ・農業や環境問題の研究から発展。フィールドである「和歌山のみかん山」の「省農業みかん」は、毎年12月に、京大内でも販売され好評！：農業ゼミ
- ・鴨川の源流に近い「雲が畑」をフィールドに、その名の通り、山工作中：山仕事サークル杉良太郎
- ・京都大学南部構内において、生ごみ、選定くずなどを利用し、自然農法（不耕起、無肥料・無農薬）を実践中！：京都大学自然農法研究会
- ・森林バイオマスを幅広く活用できるように…社会人も加わって活動中：薪く炭くKYOTO
- ・NF（京都大学の学園祭）で出た生ごみを堆肥化し、野菜を育てています！その味は格別！：有機農業研究会～minority～
- ・「体で農業を考えよう」を合言葉に、農家の方と共に農作業に挑戦！：農業交流ネットワーク

◇京都の街に広がって、多くのパートナーとエコを追求中！

- ・学×市民×産×官で、地球温暖化防止に向けた「京都議定書」達成のためのムーブメントを！：びっくり！エコ100選2006実行委員会
- ・学園祭での環境対策では、模擬店での「洗い皿」を推奨中！：環境サークルえこみっと
- ・学生力を発揮して、シンポジウムから、クラブイベントまで：国際青年環境NGOセージ
- ・京都に生きるごみ減らしの知恵を、いかに、おもしろく・かっこよく・便利に使ってもらえるか、考え、実践しています：京都R
- ・環境に関することならなんでもテーマにして、勉強会や講演会を！：環境ネットワーク4Rの会



MORE★INFORMATION

・詳しい情報は→京都大学環境保全センターホームページ<http://eprc.kyoto-u.ac.jp/>